

# Newsletter of Japanese Coral Reef Society

日本サンゴ礁学会ニュースレター 2009/2010 No.2

contents	page
新会長ごあいさつ	2
連載1:サンゴしょう夜話 -25-	2
日本サンゴ礁学会第12回大会および公開シンポジウムのご案内	3-7
連載2:しらほサンゴ村だより -3-	8
NPO/NGO紹介 -15- [琉球大学 サンゴ礁生物研究会~Reef~]	8

## 会告

### 日本サンゴ礁学会 第12回大会および公開シンポジウム

皆様のご参加を  
お待ちしております!

2009.11.27<sup>FRI</sup> ▶ 11.29<sup>SUN</sup>

沖縄「本部町立中央公民館、アジマーもとぶ」

**開催!**

ワークショップ 11/27<sup>FRI</sup> 15:00~17:40

### 「サンゴ礁学の創成 —複合ストレス下の生態系と人との共生・共存未来戦略—」

オーガナイザー：茅根 創・鈴木 款・瀧岡和夫・日高道雄・山口 徹・山野博哉

昨年度から、文部科学省新学術領域の新しい領域として「サンゴ礁学—複合ストレス下の生態系と人との共生・共存未来戦略」が始まった。本セッションでは、6つある研究課題のそれぞれについて、背景と目的、構想と成果をまとめ、総合討論を行う。

### 2009年度総会の開催について

日本サンゴ礁学会2009年度総会を、下記の通り開催いたしますのでご出席下さい。なお、総会に出席できない方は、委任状を学会事務局・浪崎直子会員 namizaki.naoko@nies.go.jp に11月16日(月)までに電子メールでお送り下さい(メールの件名に「2009年度総会委任状」と明記下さい)。委任状にはご自身の氏名と被委任者の氏名(または役職)をお書き下さい。被委任者の欄が空白の場合は、総会議長に委任とします。

日本サンゴ礁学会 会長 土屋 誠

2009年11月28日(土) 16:30~18:30 本部町立中央公民館

■ 議事(案)：会計報告、監査結果報告、予算計画、各委員会報告、総会後、学会賞・川口賞授賞式と受賞講演があります。

■ 事務局：茅根 創・浪崎直子





## 会長就任にあたって

琉球大学理学部 土屋 誠

2009年7月1日より会長の重責を担うことになりました。現在のサンゴ礁を見渡し、多くの課題が山積みになっていることを改めて考えた場合、日本サンゴ礁学会には極めて大きな責任があることが認識できます。私にこの重責を務めることが可能であるかどうか極めて不安ですが、後に戻ることは出来ません。皆様とご一緒に活動して参りますのでよろしくお願ひ申し上げます。

さまざまな攪乱を受けて環境が劣悪化したサンゴ礁に対して、私たちが為すべきこと、あるいは

は私たちに出来ることは数多くあります。基礎研究の充実と発展、現状の正確な把握とモニタリング、地元の人々と一体になった科学的根拠に裏付けられた保全活動、環境教育など、どれも重要なことばかりです。各地で進められている多様な保全活動との関わりは困難さもありますが、頼りにされる学会でありたいと思います。

この2年間はこれらの活動に取り組むための新しいステップへ踏み出す期間ととらえています。若い会員の活発な活動が顕著になっており、頼もしく感じています。さらに多くの方々にサンゴ礁に対する理解と関心を示していただくことが出来るよう務め、会員の増加につながるよう工夫する必要があります。具体的にどのような活動をすべきか、ご一緒に考え、実行しましょう。

国際的な関係も充実させる必要があります。サンゴ礁が抱えている課題は地球規模の課題であるからです。次回の第12回国際サンゴ礁シンポ

ジウムが2012年7月にオーストラリアのケアンズで、また第2回アジア太平洋サンゴ礁シンポジウムは来年6月にタイのブケットで開催されます。国内においては生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が名古屋で開催されます。その他、数多くの国際会議が開催されるようです。これらの催しに積極的に参加し、情報の交換と収集に努め、国際的なネットワークを構築し、上記の課題解決に向けた行動を起こすことが期待されます。

本年2月には初代会長をお務めになった山里清先生の逝去という全く予期していなかった事態に遭遇しました。私たちは巨大な指導者をしてしまいました。私たちは山里先生の意志を引き継ぎ、一層の努力をしなければなりません。新しい運営体制がほぼ構築されました。一刻も早くそれぞれの組織の活動を軌道に乗せ、学会全体として大きな飛躍をしたいものです。

## 連載1 サンゴしょう夜話 -25-

### ICRS 創設者

### David Stoddart 博士の出席

金沢大学名誉教授 小西 健二

次回第12回国際サンゴ礁会議(12ICRS)は、ケアンズ(オーストラリア)で2012(平成24)年7月9-13日に開催と決まった。第2回国際サンゴ礁年2008年の夏、Dodge教授を長とする現地組織委員会の周到な準備で進められた第11回国際サンゴ礁会議(11ICRS)が、世界経済不安の渦中にも拘らず、成功裡に幕を閉じてから1年余り経っている。既に本誌39号に、日本若手有志の参加報告特集が載り、本学会HPに、大会決議宣言と各シンポジウム別報告要約も、収録され、大会に参加しえなかった会員にも、その成果は広く伝えられており、今更出席報告でもないが、零れ話をいくつか披露させて頂くことにする。

開催前夜、会場に近いハイヤット・ピア44に、大会のスポンサー諸団体代表と前沖縄大会の現地組織委員会役員などが招かれ、Dodge教授の案内で大森信・山野博哉両氏と私が出席した。会場入口で皆を驚かせたのは、宿病に苦しむ病軀をおしてパークレーから出席したDavid Stoddart博士(ICRS創設者)の姿であった(写真1)。沖縄大会の喜界島巡検でカルスト地形を観たいとの申込も、希望者数に達せぬと断ったあと、Atoll Research Bulletinの津波特集544号で文通して以来の再会である。

アイズ・ブレイクでは、沖縄大会でお世話になったLang博士、畏友Done・Ginsburg・Pichon

の3教授、今回 Darwin 賞受賞の Hughes 博士ほかとも四年ぶりの歓談を楽しんだ。会食の行われた最上階から展望する港外の美しい南フロリダの海は、四半世紀の間にすっかり変貌を遂げていた。幸い翌日基調講演の口火をきる McCulloch 教授と隣合せの同席で、海洋酸性化からサンゴ骨格年代学まで語り合う前夜祭パーティとなった。沖縄では、スポンサー団体代表各位やバリ大会の現地組織委員会役員を招く「前夜祭」の余裕もなかったが、この度遅時きながら、国際会議開催の儀礼を教わった思いである。

会期中7月10日午後には開かれた国際サンゴ礁学会(ISRS)総会も、大輪の花 Stoddart に主役が変わった。依然闘病中の Grigg 博士の愛情こもる招請に応じ、Veron 博士の支える車椅子から立ち上がるや、床上マイクを両手で掴み、あたかも雄叫びのように、学会の軌跡から自身の近況に至るまで朗々と15分余り、熱弁をふるわれ、一同万雷の拍手で応じた。車椅子の Stoddart と支え立つ Veron の姿は、「地史学的時空分布の変遷を理解し、現代の自然ならびに人間活動による負荷から、サンゴ礁の生態系を護る」学会の現況を伝えるものであった。総会終了後、歴代評議員との集合写真の合間に、「老友達」も両氏を囲み入れ替わり記念写真を撮った(写真2)。

今年7月6日 Veron が英国王立協会で講演した Is the Great Barrier Reef on Death Row?(GBRの死は近いのか?) は、昨年春上梓された A Reef in Time: the Great Barrier Reef from beginning to end (ある礁の歴史: GBRの誕生から死まで)の内容を深化したもので、半世紀前サンゴ礁研究



写真1: 前夜祭会場入口で。右端から、Dodge、大森、Lang、Stoddart、Pichon、小西(敬称省略)



写真2: ISRS総会後、Stoddart、Veronとともに。後列右端からLoya、Macintyre、Glynn、Grigg、Veron。前列: Stoddart、小西(敬称省略)

者に Stoddart の論文が与えた影響を越す、刺激的な提言を含む論文である。反論・異論の声を聞くが、12ICRSを待たず、学界・政界はじめ活発な論争で世間を賑わすこと必定であろう。

# 日本サンゴ礁学会 第12回大会および公開シンポジウムのご案内

■日時：2009年11月27日（金）～11月29日（日）

■会場

大会：本部町立中央公民館、アジマーもとぶ（アジマーもとぶは27日の口頭発表のみ使用）  
 ＊最寄りバス停は第二大浜。那覇空港からのバス経路については、<http://www.cc.u-ryukyuu.ac.jp/~tilapia/>をご参照ください。  
 懇親会：ホテルモトブリゾート  
 自由集会：琉球大学瀬底研究施設、本部町立中央公民館

■第12回大会実行委員長：酒井一彦（琉球大学熱帯生物圏研究センター）  
 実行委員：中野義勝、井口亮（琉球大学熱帯生物圏研究センター）



## 》スケジュール

11月26日（木）各種委員会・評議員会	
18:00-	自由集会1（琉球大学瀬底研究施設）
11月27日（金）	
8:00-	開場、大会およびPCデータ受付開始
9:00-12:00	口頭発表（初日のみ、「本部町立中央公民館」と「アジマーもとぶ」の2会場となります）
12:00-13:00	昼食
13:00-14:45	口頭発表
15:00-17:40	公開ワークショップ 新学術領域研究（以降会場は本部町立中央公民館のみです） 「サンゴ礁学の創成—複合ストレス下の生態系と人の共生・共存未来戦略—」
18:00-	自由集会2～4（本部町立中央公民館と琉球大学瀬底研究施設）
11月28日（土）	
9:00-9:45	口頭発表
10:00-12:00	ポスター発表
12:00-13:30	昼食
13:30-16:30	シンポジウム1
16:30-18:30	総会、学会賞・川口賞受賞式および受賞講演
19:00-	懇親会（ホテルモトブリゾート）
11月29日（日）	
9:00-12:00	口頭発表
12:00-13:00	昼食
13:00-13:30	口頭発表
14:00-17:00	シンポジウム2

### 発表について

- 口頭発表の講演時間は質疑応答を含めて1人15分です。
- 発表機材は液晶プロジェクターを用意いたします。液晶プロジェクターによる講演ではWindows Vista (PowerPoint 2007) と MacOS X (PowerPoint 2008) のコンピューターを用意します。ファイルの受付は、11月27日～29日午前中に各会場で行います。受付可能なメディアはCD-RまたはUSBメモリーです。ファイル名は講演番号（半角数字：プログラム参照）に続けて講演者の姓としてください。
- ポスター発表はパネルの大きさが約180cm（縦）×90cm（横）です。この範囲に収まるように各自ポスターの大きさを設定してください。発表会場は中央公民館2階です。ポスターは大会受付後、すぐに各自の講演番号が表示されているパネルに掲示し、29日昼までに撤去してください（画鋏・セロテープ等はこちらで用意します）。発表時間は2交代制で各1時間です（プログラム参照）。

## 》公開ワークショップ

新学術領域研究「サンゴ礁学の創成—複合ストレス下の生態系と人の共生・共存未来戦略—」

日時：11月27日（金）15:00-17:40  
 場所：本部町中央公民館  
 オーガナイザー：茅根 創・鈴木 款・灘岡和夫・日高道雄・山口 徹・山野博哉

昨年度から、文部科学省新学術領域の新しい領域として「サンゴ礁学—複合ストレス下の生態系と人の共生・共存未来戦略」が始まった。本セッションでは、6つある研究課題のそれぞれについて、背景と目的、構想と成果をまとめ、総合討論を行う。

【計画研究課題発表】

- 「A01 複合ストレスに対するサンゴ—褐虫藻共生系の応答」  
日高道雄（琉球大学）
- 「A02 サンゴ礁生態系・物質循環共生系の素過程解明」  
鈴木 款（静岡大学）
- 「B01 ① ストレスとサンゴ礁の歴史的变化：画像解析」  
山野博哉（国立環境研究所）
- 「B01 ② ストレスとサンゴ礁の歴史的变化：サンゴ年輪分析」  
渡邊 剛（北海道大学）
- 「B02 サンゴ礁—人間共生系の景観史」  
山口 徹（慶応義塾大学）
- 「C01 地球温暖化に対するサンゴ礁の応答」  
茅根 創（東京大学）
- 「C02 複合ストレスの包括的評価・予測とサンゴ礁生態系応答モデル解析」  
灘岡和夫（東京工業大学）

総合討論

## 》シンポジウム1

「二酸化炭素増加がサンゴ礁域の海洋生物に及ぼす影響—分子から生理、生態まで—」

日時：11月28日（土）13:30-16:30  
 場所：本部町中央公民館  
 オーガナイザー：諏訪僚太・井口 亮

- 「挨拶及びイントロダクション」井口亮（琉球大学）
- 「シンポジウムの概要紹介」諏訪僚太（京都大学）
- 「海洋酸性化研究の概要」白山義久（京都大学）
- 「酸性化海水がサンゴの初期生活史に与える影響について」  
中村雅子（琉球大学）
- 「サンゴ礁棲有孔虫への海洋酸性化影響について」藤田和彦（琉球大学）
- 「サンゴの分子レベルでの石灰化機構について」日下部誠（東京大学）
- 「造礁サンゴにおける共生関係と白化現象の理解」  
中村崇（JSPS 特別研究員・九州大学）
- 「サンゴ白化のモデリング及びサンゴへの酸性化影響のモデリングの可能性」  
藤井賢彦（北海道大学）
- 「海洋酸性化による生物影響～これまでの研究および今後の研究の方向性について～」  
栗原晴子（琉球大学）
- 総合討論 コメンテーター：山野博哉（国立環境研究所）・渡邊敦（東京工業大学）

シンポジウム2

日時：11月29日(日) 14:00-17:00  
 場所：本部町中央公民館  
 オーガナイザー：酒井一彦・中野義勝

日本サンゴ礁学会初代会長を努められた故山里清先生の追悼国際シンポジウムです。シンポジウムのタイトルは" Current State and Future Challenges in Coral Biology: Legacy of the Late Prof. Yamazato" で、海外から4名 (Yossi Loya, Robert Kinzie III, Janny Kusen, Thamasak Yeemin)、国内から2名 (西平守孝、日高道雄) の講演を予定しています。シンポジウムの言語は英語です。詳細は学会ホームページなどに、追って連絡します。

自由集会

本大会からの新しい試みとして、学会参加者が自由に企画する自由集会を開始します。自由集会はオーガナイザーが企画・実施しますので、詳細は各オーガナイザーにお問い合わせください (@マークは全角としていただきます、半角でご入力ください)。

自由集会1：日本サンゴ礁学会「若手研究会」  
 日時：11月26日 18:00-  
 場所：琉球大学瀬底研究施設  
 オーガナイザー：樋口富彦 (higuchi @ mail.ryudai.jp)

自由集会2：「伝わってる？ サンゴ礁のこと」ーサンゴ礁インタープリテーション入門  
 日時：11月27日 18:00-  
 場所：本部町立中央公民館  
 主催：サンゴ礁保全委員会 (委員長 鹿熊信一郎)・企画担当：佐藤崇範 (satoh07 @ yahoo.co.jp)

自由集会3：日本産造礁性イシサンゴ類の分類ー現状と将来への展望ー  
 日時：11月27日 18:00-  
 場所：琉球大学瀬底研究施設  
 オーガナイザー：深見裕伸 (hfukami @ kais.kyoto-u.ac.jp)・杉原 薫 (sugihara @ fukuoka-u.ac.jp)

自由集会4：日本産イシサンゴ類の有性生殖について語ろう  
 日時：11月27日 18:00-  
 場所：琉球大学瀬底研究施設  
 オーガナイザー：広瀬慎美子 (mhirose @ zenno.jp)  
 講演予定者：野澤洋耕 (台湾中央研究院)・目崎拓真 (黒潮生物研究所)・広瀬慎美子 (琉球大)・磯村尚子 (沖縄高専)

プログラム

口頭発表			
11月27日			
【会場1】 本部町立中央公民館			
講演番号	講演時間	タイトル	発表者氏名 (所属)
1-1	9:00	サンゴ骨格中安定同位体比のモンスーン指標への応用	○島村道代 (北大・理)・入野智久 (北大・地球環境)・豊田和弘 (北大・地球環境)・Guoquan Xu (上海同済大・理)・Bingquan Lu (上海同済大・理)・Luejiang Wang (北大・地球環境)・大場忠道 (北大・地球環境)
1-2	9:15	完新世におけるサンゴ礁形成史と種多様性の変化	○本郷田軌・茅根 創 (東大・理)
1-3	9:30	LA-ICP-MSによるサンゴ骨格中の鉛含量の測定：河川からタイ湾への鉛の流出について	○田中健太郎 (琉球大・理工)・大出 茂 (琉球大・理)
1-4	9:45	Fringing reefにおける赤土移流拡散・堆積・再浮上過程の数値シミュレーション解析	○前田勇司 (東京工業大学)・瀧岡和夫 (東京工業大学)・金城孝一 (沖縄県衛生環境研究所)・仲根根一哉 (沖縄県衛生環境研究所)
1-5	10:00	衛星画像を用いた石垣島轟川流域における土地被覆分類	○石原光則 (国立環境研究所)・長谷川 均 (国土館大学)・林 誠二 (国立環境研究所)・山野博哉 (国立環境研究所)
1-6	10:15	ユビキタスを用いたサンゴ礁保全のための水温観測網の構築	○和田雅昭 (ほこだて未来大)・畑中勝守 (東農大)・吉田 隆 (MICT)・戸田真志 (ほこだて未来大)
	10:30	休憩	
1-7	10:45	泡瀬干潟埋め立て工事に伴う大規模サンゴ移植とそのモニタリング	○内村真之・山里祥二・成田龍一 (NPO 法人コーラル沖縄)
1-8	11:00	生分解性ネットを用いたサンゴ群集再生技術の開発	○山本克則・取達 剛・横関康祐 (鹿島技研)・日野林讓二 (大日本プラスチック)・中野裕治 (タキロンプロテック)・大葉英雄 (海洋大)
1-9	11:15	電場が及ぼすサンゴ成長促進効果の実海域における検証	木原一禎 (三菱重工鉄構エンジニアリング (株))・鯉淵幸生 (東京大 大学院)・谷口洋基 (阿嘉島臨海研究所)・近藤康文 (株/ピーファム)・山本 悟 (日本防蝕工業 (株))
1-10	11:30	電着基盤の有性生殖によるサンゴ着生 (着床) 効果について	○木原一禎 (三菱重工鉄構エンジニアリング (株))・鯉淵幸生 (東京大 大学院)・谷口洋基 (阿嘉島臨海研究所)・近藤康文 (株/ピーファム)・山本 悟 (日本防蝕工業 (株))
1-11	11:45	ヤイトハタにおける早期性転換誘導技術の確立	○村田良久 (琉球大・理工)・狩俣洋文 (沖縄水産大)・中村 将 (琉大熱生研)
		昼食	
1-12	13:00	サンゴ礁学習プログラム (Coral Reef Study) 開発 修学旅行の事前・事後学習と組み合わせた実践普及	○山岸 豊・平井和也 (尚ちむちゅらさ)・藤田喜久 (海研)・今宮則子 (海研)・中野義勝 (琉大瀬底実験所)・笹刈純平 (環境省)
1-13	13:15	沖縄県のレジャーダイビングに関するダイバー行動調査	○横井謙典 (沖縄県ダイビング安全対策協議会)・豊島淳子 (東工大)・瀧岡和夫 (東工大)
1-14	13:30	座間味村におけるダイビング・ポイントの利用と珊瑚礁保全の取り組みについて	○圓田浩二 (沖縄大学)
1-15	13:45	沖縄県近海離島におけるサンゴ礁保全に関する住民アンケート調査ー座間味村を事例としてー	○藤澤宜広 (沖縄大・法経)
1-16	14:00	サンゴ礁保全に資する持続可能な地域づくりー石垣島白保でのWWFジャパンの取り組みー	○上村真仁 (WWF ジャパン)
1-17	14:15	宮古島のサンゴ礁保全に関する提案：オニヒトデ駆除とサンゴ礁保全に役立つオニヒトデ駆除の提案	○猪澤也寸志 (エコガイド教育コンソーシアム)
1-18	14:30	和歌山県地域におけるサンゴ保全と経済効用の研究・序説	○齊藤久美子 (和歌山大・経済)
【会場2】 アジマーもとぶ			
1-19	9:00	南西諸島のココビミドリイシにおける緯度と遺伝的多様性の相関、及び遺伝的分化の有無	○中島祐一・西川 昭・井口 亮・酒井一彦 (琉球大・熱生研)
1-20	9:15	ココビミドリイシ・ゲノムプロジェクト	○新里由也・佐藤矩行 (OIST)
1-21	9:30	ミドリイシ属サンゴー産卵後の着生ピーク期の推定	○鈴木 豪・新垣誠司・林原 毅 (西水研・石垣)
1-22	9:45	飼育枝状ミドリイシの分類・および繁殖について	○山本広美・金谷悠作・甲斐清香・野中正法 (沖縄美ら海水族館)・磯村尚子 (沖縄高専)
1-23	10:00	ウニ類がサンゴ幼生の着生および幼ポリプの生残に及ぼす影響	佐藤 力・大森 信 (阿嘉島臨海研究所)
1-24	10:15	座間味島 (沖縄県慶良間諸島) の八放サンゴの一種に確認されたシアノバクテリアの病的付着について	○山城秀之・磯村尚子 (沖縄高専生物資源)

	10:30	休憩	
1-25	10:45	サンゴ礁縁溝部の「ガレ場」ーベントス群集のハビタットとしての評価	○中野義勝(琉大・熱生研)・小淵正美(琉大・ライジングスター)・藤田喜久(琉大・教育センター、海の自然史研究所)
1-26	11:00	サンゴ礁「ガレ場」に生息するセンコヒメウミシダの繁殖生態	○小淵正美(琉大・ライジングスター)・藤田喜久(琉大・教育センター、海の自然史研究所)・中野義勝(琉大・熱生研)・上原 剛(琉大・理)・本川達雄(東工大・生命)
1-27	11:15	沖縄島大浦湾における十脚甲殻類の種多様性	○藤田喜久(琉大/海の自然史研究所)・大澤正幸(琉大)・奥野淳児(千葉博)・駒井智幸(千葉博)・成瀬真(琉大)
1-28	11:30	狭空間に生息する未記載スギンチャクの分類について	○藤井琢磨(琉球大・理工)・James D. Reimer(琉球大・亜熱帯島嶼)
1-29	11:45	マレーシアのサンゴ礁における動物プランクトン群集の生物量と生産量	○中嶋亮太(創価大・工)・吉田輝明(UKM)・BHR Othman(UKM)・戸田龍樹(創価大・工)
		昼食	
1-30	13:00	ミドリイシサンゴ幼生の変態シグナル経路の地域性	○松島夏苗・服田昌之・清本正人(お茶大)・鈴木 豪・林原 毅(西海区水研石垣)・目崎拓真(黒潮研)
1-31	13:15	<i>Galaxea fascicularis</i> の組織抽出液における OH ラジカルの光生成	○樋口富彦・藤村弘行・人見勇矢・新垣雄光・大森 保(琉球大)・鈴木 款(静岡大)
1-32	13:30	Polyp gastric cavity: characteristics and processes	○Agostini Sylvain, Suzuki Yoshimi, Yoshikatsu Nakano, Casareto Beatriz
1-33	13:45	トゲクサバライシ <i>Ctenactis echinata</i> のデロメア長は骨格重量(年齢)とともに減少する	○大慈彌みち子(琉球大・理工)・Yossi Loya(Tel Aviv uni.)・日高道雄(琉球大・理)
1-34	14:00	スギノキミドリイシ ( <i>Acropora formosa</i> ) の分泌する粘液ムチンの化学構造解析	○速水 悠・小栗聡介・山岡耕作・大谷和弘(高知大院・黒潮圏)
1-35	14:15	Role of coral mucus as a source of dissolved organic nitrogen (DON) in coral reef waters	○Fairoz M.F.M, Suzuki Y, Casareto B, Sylvain A, Irikawa A (Environment & Energy Systems, Shizuoka Univ.)
1-36	14:30	礁原～礁斜面を含めたサンゴ礁域の炭素循環	○中村隆志(北大・院理)・中森 亨(東北大・院理)
<b>11月28日 本部町立中央公民館</b>			
2-1	9:00	高知県電串湾に生息する造礁性サンゴ骨格を用いた古環境復元	○山崎敦子(北大院理)・渡邊 剛(北大院理)・嶋 康輝(北大院理)・中地シユウ(黒生研)・山野博哉(国環研)・岩瀬文人(黒生研)
2-2	9:15	サンゴの化石から過去の気候を復元する	○浅海竜司(琉球大・超域)・井龍康文(名大・環境)
2-3	9:30	<i>Hippopus hippopus</i> (シャコガイ科シャコウ) の骨格記録は古環境指標として有用である	○井龍康文(名古屋大・環境)・Aubert, A.・Lazareth, C. E.・Cabioc, G.・Boucher, H. (Centre IRD France Nord)・Yamada, T. (東北大・理)・Farman, R. (Aquarium des Lagons, New Caledonia)
		昼食	
<b>11月29日 本部町立中央公民館</b>			
3-1	9:00	サンゴ礁の水柱・底質における褐虫藻の出現	○山下 洋(広大院生物圏)・鈴木 豪(西海水研石垣)・林原 毅(西海水研石垣)・小池一彦(広大院生物圏)
3-2	9:15	小笠原列島鳥島沿岸砂サンプルより分離された褐虫藻について	Shah-M M R-Shiniger-F Reimer-JD・須田彰一郎(琉球大)
3-3	9:30	様々な褐虫藻ストレインの光合成活性	○小池一彦(広大院生物圏)・山下 洋(広大院生物圏)
3-4	9:45	水温上昇はイシサンゴからの褐虫藻放出を誘発するか? : 水槽実験と定量 PCR による検証	○松岡 友(広大生物生産)・山下 洋(広大院生物圏)・由良順子(広大生物生産)・鈴木 豪(西海区水研石垣)・林原 毅(西海区水研石垣)・小池一彦(広大院生物圏)
3-5	10:00	<i>Stylophora pistillata</i> associated with different <i>Symbiodinium</i> clades are deep-divergence lineages : acclimatization or cryptic species?	○ Sung-Yin Yang・Chaolun Allen Chen(Academia Sinica-Biodiversity Research Center)・Chien-Hsun Chen・Yi-Ting Lein・Nuwei Vivian Wei・Yaoyang Chuang・Chang-Feng Dai(National Taiwan Uni-Institute of Oceanography)・William K. Loh(Uni of Queensland-Centre for Marine Studies)・Affendi Yang-Amri(Uni of Malaya-Institute of Biological Sciences)・Avigdor Abelson(Tel Aviv Uni-Department of life science)・Angus Macdonald(Oceanographic Research Institute)・James Reimer(琉球大・理工)・David Obura(CORDIO)・Oliver Taylor・Charles Sheppard (Uni of Warwick-Department of Biological Science)
3-6	10:15	ムカデミノウミウシ-褐虫藻共生系の系統地理	○依藤実樹子・東陽一郎・武島弘彦・馬淵浩司・渡邊俊樹・西田 睦(東大・海洋研)
	10:30	休憩	
3-7	10:45	ケニヤサンゴ年輪から復元された 20 世紀半ばのインド洋モードシフト	○中村修子(東大・理)
3-8	11:00	地球温暖化に伴う水温上昇がサンゴ分布の北限に及ぼす影響評価とその不確実性	○屋良由美子(北大地球環境)・藤井賢彦(北大地球環境)・山中康裕(北大地球環境)・岡田直寛(北大地球環境)・山野博哉(国立環境研)・大島和裕(北大地球環境)
3-9	11:15	サンゴ礁保全の枠組みと日本における保全活動の状況	○中井達郎(国士館大学・立正大学非常勤講師)
3-10	11:30	2004 年から 2008 年のサンゴ礁の現状 (モニタリングサイト 1000 事業によるモニタリング結果の紹介)	○木村 匡(日本サンゴ礁モニタリングネットワーク)
3-11	11:45	2003-2009 年石西礁湖の稚サンゴ加入状況について	○野島 哲(九州大)・岡本峰雄(東京海洋大)・上野光弘(石西礁湖生態調査)
		昼食	
3-12	13:00	Spatial distribution and temporal variation of <i>Terpios hoshinota</i> outbreak in Ludao(Taiwan)	○ Shuli Chen (Inst. Ocean, National Taiwan Univ)・Chaoyang Kuo・Chaolun Allen Chen (Biodiversity Res Ctr, Academia Sinica)
3-13	13:15	高解像度航空写真を用いた野外調査 : イソギンチャクの回復期の分布様式	○服部昭尚(滋賀大・教育)
3-14	13:30	Recoveries of degraded coral communities and possible involved functional groups.	○ HERNYI Justin Hsieh(Penghu Marine Biology Research Center, Fishery Research Institute, COA, EY, Taiwan)・Chaolun Allen Chen(Academia Sinica-Biodiversity Research Center)

<b>ポスター発表</b>			
P-1	サンゴ礁物質循環モデルの開発ー基本概念、構成要素とパフォーマンス	○渡邊 敦(東工大・情報理工)・瀧岡和夫(東工大・情報理工)・山本高大(東工大・情報理工)・前田勇司(東工大・情報理工)・田中泰章(東工大・情報理工)・宮島利宏(東大・海洋研)	
P-2	The Spatio-Temporal Dynamics of Groundwater Discharge in Shiraho Reef Investigated using Electrical Resistivity Profiling and Radon Tracing	○ Ariel C. Blanco(フィリピン大)・渡邊 敦(東工大・情報理工)・瀧岡和夫(東工大・情報理工)・陳 祥光(東工大・情報理工)・本村裕基(東工大・情報理工)・前田勇司(東工大・情報理工)	
P-3	竹富島コンドイビーチの有機汚濁	○田代 豊・平安山良真・安里翔吾・神村賢次郎・古我知大・比嘉義郎(名桜大・国際)	
P-4	Nitrogen fixation in fringing coral reefs: a comparison among different sub-environments.	○ CASARETO Beatriz E, NIRLAULA Mohan, SUZUKI Toshiyuki, OHBA Hideo, AGOSTINI Sylvain, SUZUKI Yoshimi	
P-5	沖縄サンゴ礁の砂地の基礎生産量	○田代 翼・Casareto Beatriz・Agostini Sylvain・入川暁之・鈴木 款(静岡大)	
P-6	深海サンゴのフッ素含量と海水中の炭酸イオン濃度の関係について	○田中健太郎(琉球大・理工)・大出 茂(琉球大・理)・藤岡義三(水産総合研究所)	
P-7	サンゴ礁海水の浮遊有機物中に含まれる微量金属元素の粒径別濃集過程	○藤村弘行(琉球大・理)・Casareto BE(LASC & Shizuoka Univ.)・樋口富彦・大烈・大森 保(琉球大・理)・鈴木 款(静岡大・創造科技院)	
P-8	ラドン ( $^{222}\text{Rn}$ ) を用いた黒島サンゴ礁域への地下水流出特性の把握	○本村裕基・瀧岡和夫・渡邊敦・陳 祥光・山本高大(東工大・情報理工)・Ariel Blanco (UP)	
P-9	石垣島宮良川河口域における塩分・リン酸塩プロットを規定する要因	○阿部和雄(西水研石垣)	
P-10	漫湖干潟における堆積速度と重金属の経年変化	○鈴木秀隆(琉球大・理工)・棚原 朗(琉球大・機器分析支援センター)	

P-11	那覇沖チービシ、ルカン礁と、西表島北東バラス島における州島形成要因	○青木健次(東京大・理)・中村修子(東京大・理)・茅根 創(東京大・理)・福島朋彦(東京大・海洋アライアンス)・磯部雅彦(東京大・新領域)
P-12	硬骨海綿骨格中の鉛同位体を用いた海洋鉛放出源の時系列変動	大森一人・○渡邊 剛(北大院理)・谷水雅治(JAMSTEC)・松岡 淳((株)マリンワークスジャパン)・井上麻夕里(東大海洋研)・白井厚太郎(東大理)
P-13	Preliminary Results to Determine MPAs Sites by Using High Resolution Nutrient-Ocean Circulation Coupled Model around 'Wallace Line' Regions.	○A. R. Kartadikaria(東工大・情報理工)・瀬岡和夫(東工大・情報理)・宮澤泰正(Jamstec)・笹井義一(Jamstec)
P-14	Capacity Enhancement Project for Coral Reef Monitoring (PICRC/JICA) aims better management of Marine Protected Areas in Palau and other Micronesian islands through collaboration with Micronesia Challenge	○L. A. Isechal(PICRC)・Y. Golbuu(PICRC)・S. Nakaya(PICRC)・C. Mersai(MC)
P-15	石垣島白保の定測線における11年間のサンゴ群集被度変化	○波利井佐紀(東大・理)・井手陽一(海洋プランニング(株))・本郷由軌・茅根 創(東大・理)
P-16	石垣島白保サンゴ礁における2007年白化後のサンゴ群集の変遷	○佐川鉄平・○鈴木智子・前川 聡(WWFジャパン)
P-17	石垣島白保の永久方形区内での造礁サンゴ群集の経年変化	○杉原 薫・小野由樹子(福岡大・理)
P-18	阿嘉島周辺のアオヒトデ被害と駆除活動の効果	○谷口洋基(阿嘉島臨海研究所)
P-19	四国西南海域における造礁サンゴの分布と幼生加入について 2004-2009	○長谷川亮太(東海大・院)・久保紗紀子(東海大・海洋)・沼津雅憲(東海大・海洋)・岩瀬文人(黒潮生物研究財団黒潮生物研究所)・横地洋之(東海大学海洋研究所)
P-20	Reef-building corals migrate into marginal high-latitude region: A response to climate change?	○Mei-Fang, Lin(Academia Sinica・Biodiversity Research Center)・Chaolun Allen Chen(Academia Sinica・Biodiversity Research Center)
P-21	小サンゴ群集と小型海藻の基盤を巡る競争	○玉井玲子(琉球大・院・理工)・酒井一彦(琉球大・熱生研)
P-22	奄美大島のクロマクロ生質ロープ上に形成されたサンゴ群落	○日比野紘大(近畿大・農)・向井良夫(近畿大・水産養殖種苗センター)・畑 啓生(近畿大・農)
P-23	静岡県沼津市内浦江梨地先における造礁サンゴ類の群集構造	○日越真大(東海大学院)
P-24	石西礁湖における水深40m以深のサンゴ分布について	○古島靖夫(海洋研究開発機構)・Marc Humblet(東大・海洋研)・山本啓之(海洋研究開発機構)・徳山英一(東大・海洋研)・宮城 博(国際海洋環境情報センター)・丸山 正・藤倉克則(海洋研究開発機構)
P-25	The deep photosynthetic reef ecosystem in the Ryukyu Islands	○Humblet, M., Furushima, Y., Yamamoto, H., Maruyama, T., Iryu, Y., Tokuyama, H.
P-26	Impact of sedimentation from land-use change on coral reef communities	○G. Merop(PICRC)・K. Fabricius(AIMS)・A. Merop(PICRC)・S. Nakaya(PICRC)・Y. Golbuu(PICRC)
P-27	Nutrient enrichment causes by marine cage culture and its impact on the benthos composition in the subtropical coral reefs in the Penghu Islands, Taiwan	○Yuan Chao Angelo, Huang(Institute of Oceanography, National Taiwan University)・Chaolun Allen Chen(Academia Sinica・Biodiversity Research Center)
P-28	トカラ火山列島硫黄島島における酸性・高温下での造礁サンゴからソフトコーラルへの群集シフト	○井上志保里(東大・理)・東京大学海洋調査探検部硫黄島島遠征隊・茅根 創(東大・理)
P-29	酸性化海水がココビドリイシ <i>Acropora digitifera</i> の石灰化に与える影響-精密CO <sub>2</sub> 制御装置を用いた近未来予測	○大木 駿(琉大・理工)・井口 亮(琉大・熱生研)・井上麻夕里(東大・海洋研)・小崎沙織(東大・海洋研)・中村崇(九大・理)・酒井一彦(琉大・熱生研)・鈴木 淳(産総研)
P-30	酸性化海水がサンゴ骨格の微量元素比に与える影響	○小崎沙織(東大・新領域)・井上麻夕里(東大・海洋研)・大木 駿(琉大・理工)・井口 亮(琉大・熱生研)・中村 崇(九大・理)・酒井一彦(琉大・熱生研)・鈴木 淳(産総研)・川橋徳高(東大・海洋研)
P-31	海洋酸性化と温暖化がクマノミ類の初期発生に及ぼす影響	○福田通子(長大院・生産)・栗原晴子(琉大・超域)・石松 偉(長大・海セ)
P-32	石垣島白保サンゴ礁における群集スケールでの酸性化応答~実験, 現場実験, 観測の比較~	○山本将史・山内大輝・本郷由軌・茅根 創(東大・理)・渡邊 敦(東工大)・所 立樹・加藤 健・根岸 明・野崎 健(産総研)
P-33	亜熱帯海草藻場における魚類群集と葉上性動物群集	○新垣誠司・下田 徹・山田秀秋(西水研石垣)
P-34	サンゴ礁生物群集の環境傾度分析	○仲宗根一哉(沖縄県・衛環研)・大代 哲(沖縄沖縄分析セ)・金城孝一・大城洋平(沖縄県・衛環研)
P-35	沖縄島周辺離島におけるサンゴの現状-伊平屋島、伊是名島、久米島、波名喜島及び菜園島-	○小笠原敬・山川英治・長井 隆・長田智史(沖環科)
P-36	沖縄島西海岸の都市域に隣接するサンゴ礁の現況とその変遷	○金城孝一(沖縄県衛生環境研究所)・瀬岡和夫(東京工業大学)・上野光弘(石西礁湖サンゴ礁調査)・仲宗根一哉(沖縄県衛生環境研究所)・渡邊康志(GIS沖縄研究室)
P-37	2009年小笠原諸島におけるサンゴの大規模白化(速報)	○佐々木哲朗・鈴木 創・堀越和夫(小笠原自然文化研究所)
P-38	広域サンゴモニタリングのための船舶搭載型イメージング蛍光ライダーの開発	○篠野雅彦・田村兼吉・樋富和夫・桐谷伸夫・山之内博・松本 陽(海技研)
P-39	蛍光タンパク質の特性を利用したサンゴモニタリング手法	○松本 陽・田村兼吉・樋富和夫・桐谷伸夫・山之内博・篠野雅彦(海技研)・荒川久幸(海洋大・海洋科学)
P-40	GISを用いた南西諸島における生物多様性優先保全地域の抽出	○安村茂樹(WWFジャパン)・島崎彦人(国立環境研)・柴田 剛(エアロフォトセンター)・中井達郎(国土館大学)
P-41	リーフチェック10年	○土川 仁・宮本育昌・菅原正臣・池田慎也・伊藤 健一・高井 航・富弥 充(コーラル・ネットワーク)
P-42	空中写真分析による石垣島周辺のサンゴ礁海底被覆と土地利用の変遷評価: その2	○渡邊康志(GIS沖縄研究室)・瀬岡和夫(東工大)
P-43	Spatial dependence analysis of coral bleaching on water temperature and bathymetry using Quick bird data for Ishigaki Island	○Ankita Dadhich(東工大・情報理工)・瀬岡和夫(東工大・情報理工)・山本高大(東工大・情報理工)
P-44	Physiological differences in the coral <i>Stylophora pistillata</i> sampled from the North and South of Taiwan	○Keshavmurthy S, Hsu CM, Wang, JT, Chen A(Academia Sinica・Biodiversity Research Center)
P-45	ミドリイシサンゴ初期ポリブにおける骨格形成過程	藤原英史((株)ドキュメンタリーチャンネル)・松島夏苗・○服田昌之(お茶大)
P-46	ストレス条件下で形成されたミドリイシ属サンゴ二次ポリブ骨格の微細構造	○豆野昂志(琉球大・理)・波利井佐紀(東京大・理)・湯山育子・日高道雄(琉球大・理)
P-47	栄養塩(硝酸態)のサンゴ共生体に与える影響	○城間和代(静大)・鈴木 歎(静大)・石川義朗(環境科技研)・Beatriz Casareto(静大)
P-48	海域環境中のサンゴのストレス応答の季節変動	○大城洋平・金城孝一・仲宗根一哉・城間博正(沖縄県衛生環境研究所)
P-49	ウスエダミドリイシ幼生と一次ポリブのストレス応答性遺伝子の解析	○湯山育子(琉球大・理)・波利井佐紀(東京大・理)・日高道雄(琉球大・理)
P-50	サカサクラゲ <i>Cassiopea andromeda</i> の生活環各ステージ間のテロメア長比較	○大慈彌みち子(琉球大・理工)・日高道雄(琉球大・理)
P-51	イワスナギンチャク ( <i>Palythoa tuberculosa</i> ) の精子形成と初期発生過程の形態学的観察	○広瀬慎美子(琉球大・理工)・小淵正美(琉球大・ライジングスタープログラム)・James D. Reimer(琉球大・ライジングスタープログラム & JAMSTEC)
P-52	造礁サンゴにおける卵黄タンパク質の局在	○中島祐一(琉球大・熱生研)・諏訪僚太(京大・瀬戸臨海実験所)・中村 将(琉球大・熱生研)
P-53	琉球列島産宝石サンゴ類の生殖腺観察	○野中正法(沖縄美ら海水族館)・中村 将(琉球大学熱帯生物圏研究センター)
P-54	石西礁湖にサンゴの病気が蔓延するまで	○上野光弘(石西礁湖サンゴ礁調査)・木村 匡((財)自然環境研究センター)・下池和幸((財)自然環境研究センター)・砂川政信(八重山漁協)
P-55	White syndrome の症状の進行とサンゴ体内の素過程の変化	○鈴木利幸(静岡大・創造科学)・森 啓嘉(静岡大・院・理)・平川徹弥(静岡大・理)・吉永光一(静岡大・創造科学)・鈴木 歎(静岡大・創造科学)
P-56	ハマサンゴ属マイクロアトールの異質パッチ: 病変・同種変異・異種の検討	○松島夏苗・服田昌之(お茶大)
P-57	オオスリバチサンゴのホワイスポットシンドローム部分に観察される細菌について	○山城秀之・磯村尚子・池松真也(沖縄高専生物資源)
P-58	Genotyping the <i>Symbiodinium</i> communities in healthy and diseased <i>Montipora capitata</i> from Kaneohe Bay	○牧野 梓(慶應・環情)・Michael Stat(HIMB/SOEST, Univ. Hawaii)・Ruth Gates(HIMB/SOEST, Univ. Hawaii)

P-59	Long-term <i>Symbiodinium</i> community dynamics of <i>Isopora palifera</i> in Taiwan.	○ Chia-Min Hsu(Academia Sinica·Biodiversity Research Center)·Chaolun Allen Chen(Academia Sinica·Biodiversity Research Center)
P-60	温帯域の造礁サンゴに内部共生する褐虫藻タイプ C* の ITS を用いた遺伝的解析	○ Lien Yi-Ting (京大・瀬戸臨海)・山下 洋 (京大・舞鶴水産)・深見裕伸 (京大・瀬戸臨海)
P-61	<i>Acropora tenuis</i> の褐虫藻獲得にはレクチンが関与する	○谷本典加・神保 充 (北里大・海洋)・山下 洋・小池一彦 (広大・生物圏)
P-62	サンゴ寄生性無腸類ワミノアの共生藻は垂直伝搬する	○彦坂智恵・小池香苗 (広島大・自然セ)・山下 洋 (広島大・院生物圏)・彦坂 暁 (広島大・院総合)・小池一彦 (広島大・院生物圏)
P-63	異なる温度条件下での培養褐虫藻 6 株の成長速度、運動性、光合成活性	杉山麻美・湯山育子・○日高道雄 (琉球大・理)
P-64	サンゴから放出される褐虫藻量は時期によって変化するのか：同一サンゴ群体からの追跡	○山下 洋 (広大院生物圏)・鈴木 豪 (西海水研石垣)・林原 毅 (西海水研石垣)・松岡 友 (広大生物生産)・小池一彦 (広島大・院生物圏)
P-65	シゲミカトサカ レクチンの褐虫藻への影響の定量化	○神保 充・墨田裕也 (北里大・海洋)・小池一彦 (広大・生物圏)
P-66	ココビミドリシにおける光合成・石灰化への環境影響	○中村 崇 (九大・理)・山崎征太郎・YeongShyanYuen・山崎秀雄 (琉大・理)・野島 哲 (九大・理)
P-67	Survival dynamics of reef coral larvae with special consideration of larval size and the genus <i>Acropora</i>	○ Yoko Nozawa (Academia Sinica) and Nami Okubo (Kyoto U・Seto MBL)
P-68	スリパチサンゴ属におけるオオスリパチサンゴの特異性	○北野裕子 (京大・瀬戸臨海)・野村恵一 (串本海中公園)・深見裕伸 (京大・瀬戸臨海)
P-69	ヒラタオオトゲキクメイシとヒメオオトゲキクメイシの分類学的研究	○座安佑奈 (京大理学研究科・瀬戸臨海)・野村恵一 (串本海中公園)・深見裕伸 (京大・瀬戸臨海)
P-70	キクメイシ類における隠蔽種の存在の可能性	○深見裕伸 (京大・瀬戸臨海)
P-71	日本産 <i>Favia</i> の骨格形態と遺伝子の多様性	○永田俊輔 (福岡大・院理)・杉原 薫 (福岡大・理)・深見裕伸 (京大・フィールド科学教育研究センター)
P-72	沖ノ島産稚サンゴの移植 1 年間のモニタリング結果	○北野倫生・三宅崇智・山本秀一 (エコー)・安藤 巨・石岡 昇 (水産土木建設技術センター)・森 健二・中村 誠 (水産庁)
P-73	魚類による移植サンゴへの食害状況について	○三宅崇智・北野倫生・山本秀一 (エコー)・安藤 巨・石岡 昇 (水産土木建設技術センター)・森 健二・中村 誠 (水産庁)
P-74	サンゴ増殖用電着基盤の構築	○木原一禎 (三菱重工鉄構エンジニアリング(株))・鯉淵幸生 (東京大 大学院)・谷口洋基 (阿嘉島臨海研究所)・近藤康文 (株式会社ピーファーム)・山本 悟 (日本防蝕工業(株))
P-75	サンゴ移植活動	○中村明毅 (沖電開発㈱)
P-76	サンゴ種苗生産の現状と課題	○中村良太・石岡 昇 (水産土木センター)・森 健二・中村 誠 (水産庁)
P-77	移植サンゴの成長と魚類の棲み込み	○西平守孝 (海洋博記念公園管理財団)
P-78	格子状基盤を使用したサンゴ増殖技術の開発-1. サンゴ幼生の最適な種付け(放流)密度の検討-	○林原 毅 (西水研石垣)・鈴木 豪 (西水研石垣)・鈴木 清 (ダイクレ)・家久侑大 (ダイクレ)・新垣誠司 (西水研石垣)・洪野拓郎 (養殖研)
P-79	サンゴ移植：群集修復の目標と移植種の選択	○向草世香 (JST さきがけ)・巖佐 庸 (九大・理)
P-80	NPO によるサンゴ有性生殖法を用いた増殖及び移植の試み	○山里祥二 (NPO 法人コーラル沖縄)
P-81	那覇港・石垣港・平良港の港湾整備におけるサンゴ群体移植技術の取り組み	前幸地紀和・與那嶺和史・島田雅志 (沖縄総合事務局開発建設部港湾計画課)・津田修一 (那覇港湾・空港整備事務所)・嶋倉康夫 (石垣港湾事務所)・小早川弘 (平良港湾事務所)・小島 栄・坂井隆行 (財団法人港湾空間高度化環境研究センター)・山本秀一・○岩村俊平 (株式会社エコー)
P-82	「有性生殖によるサンゴ増殖の手引き」について	○中村 誠・森 健二 (水産庁)・中村良太・安藤 巨・石岡 昇 (水産土木センター)・山本秀一・北野倫生 (エコー)・綿貫 啓 (アルファ水工)・青田 徹 (不動テトラ)・三上信雄 (水工研)
P-83	沖縄近海のバヤオに付着した造礁サンゴ類およびサンゴに共生するカニ類の報告	○東地拓生・甲斐清香・金谷悠作・山本広美 (沖縄美ら海水族館)
P-84	サンゴ礁に生息するオトヒメエビの行動周期における光の影響	○江阪有里子 (琉球大・理工)
P-85	沖縄本島におけるハブクラゲの分布状況および飼育下での繁殖	○伊芸 元・柿崎智弘 (沖縄美ら海水族館)・金本昭彦・大場淳子 (オービーバイオファクトリー)
P-86	サンゴ礁洞穴に生息する未記載スナギンチャクの種類及び繁殖生態に関する研究	○伊礼由佳 (琉球大・理工)・James Davis Reimer (琉球大・ライジングスター)
P-87	Genetic connectivity of coconut crab ( <i>Birgus latro</i> ) in Indo-West Pacific Ocean.	○ Chai-Hsia Gan and Chaolun Chaolun Allen Chen(Academia Sinica·Biodiversity Research Center)
P-88	生息環境変化がミツボシキユセンの脳内モノアミンに及ぼす影響	○柴田より子 (琉球大・理工)・内村美幸 (琉球大・理工)・許 成灼 (琉球大・理工)・竹村明洋 (琉球大・熱生研)
P-89	サンゴ礁魚類の脳内光受容体・クローニングと発現解析	○竹内悠紀 (琉球大・理工)・朴 龍柱 (済州大・海洋)・許 成灼 (琉球大・理工)・竹村明洋 (琉球大・熱生研)
P-90	Importance of environmental factors in the reproductive activities of a tropical damselfish <i>Chrysiptera cyanea</i> during different phases of reproductive season	○ Mohammad Abu Jafor Bapary University of the Ryukyus ? Akihiro Takemura University of the Ryukyus
P-91	雌性先熟魚ミツボシキユセン <i>Halichoeres trimaculatus</i> の性転換過程における DMRT1 発現変化	○野津 了 (琉大・理工)・堀口 涼 (基生研)・村田良介 (琉大・理工)・小島 豊 (OIST)・中村 将 (琉大・熱生研)
P-92	海洋博覧会記念公園海域における海藻・海草類の生息状況	○金谷悠作 (沖縄美ら海水族館)・岩永洋志登・岩橋浩輔 (沖縄環境分析センター)・山本広美 (沖縄美ら海水族館)
P-93	日本海に生息する造礁サンゴ・観光資源としての価値と隠岐郡海士町における環境保全活動	城之内直也 (松島ダイビング推進協議会 事務局 海士ダイビングサービス)・○神木隆行 (プラス事業海士町推進協議会)
P-94	大洋州の海と人との共生に向けてー沿岸資源保全・管理に対する JICA の取り組みー	○田村 貴 (JICA)・中谷誠治 (JICA)・杉山俊士 (JICA)
P-95	沖縄県のレジャーダイビングに関するサンゴ礁保全意識調査	○豊島淳子 (東工大)・横井謙典 (沖縄県ダイビング安全対策協議会)・瀬岡和夫 (東工大)
P-96	サンゴ礁ネットワーク WEB システムを利用した情報発信	○仲村 亮・菊池絵美・澤野健三郎・饒辺寿一 (MWJ)・廣瀬重之 (JAMSTEC)
P-97	都市部でのサンゴ礁保全の普及啓発事例	○宮本育昌・小笠原啓一・手塚幸恵・堀米真樹 (CN)
P-98	日本全国みんなでつくるサンゴマッププロジェクト：2年間の成果とこれから	○浪崎直子・山野博哉・鈴木倫太郎 (国立環境研)・大堀健司 (エコツアーふくみみ)・翁長 均 (ネイチャーワークス)・岸本多美子 (月刊ダイバー)・佐川鉄平・町田佳子・安村茂樹 (WWF ジャパン)・佐藤宗範 (環境省国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター)・嶋谷 隆 (マリンダイビング)・土川 仁・宮本育昌 (コーラル・ネットワーク)・春川京子 (セブンシーズ宮古島)・平手康市 (沖縄県企画部水産海洋研究センター)・古瀬浩史 (自然教育研究センター)・鋒山謙一 (ルーツ&シューズおきなわ)・山中康司 (NPO 法人日本安全潜水教育協会)
P-99	サンゴの移動飼育水槽を用いた北海道における環境教育の試み	○池田昌隆・渡邊 剛 (北海道大学大学院理学院)・山崎敦子・河村 卓 (北海道大学大学院理学院)
P-100	サンゴ礁保全のための環境教育プログラム「この先海です。プロジェクト」について	○今宮則子 (海の自然史研究所)・藤田喜久 (琉大 / 海の自然史研究所)・平井和也 (海の自然史研究所)
P-101	ツバヒにおけるハマサンゴ年輪の $\delta^{15}N$ 変動と人為影響	○細井 豪・中村修子・茅根 創 (東京大・理)・山野博哉 (国立環境研)・高畑直人・佐野有司 (東京大・海洋研)
P-102	石垣市白保周辺の造礁サンゴパッチ分布パターン	○中森 亨 (東北大・院理・地学)・中村政彦 (東北大・院理・地学)・前川 聡 (WWF ジャパン)・鈴木倫太郎 (国立環境研究所)・長谷川 均 (国士館大学)
P-103	高知県西南部における造礁サンゴの産卵パターン	○目崎拓真 (黒潮生物研究所)・林 徹・宮本麻衣・佐野美月 (奄美観光振興会)・中野正夫 (シーホース)・中地シュウ (黒潮生物研究所)・岩瀬文人 (黒潮生物研究所)
P-104	サンゴの褐虫藻に及ぼす温度変化の影響	○森 啓嘉 (静岡大・理)
P-105	<i>Briareum</i> 属 (花虫綱・八放サンゴ亜綱) に見られる形態バリエーションについての分類学的検討	○宮崎 悠 (琉球大・理)・James Davis Reimer (琉球大・ライジングスター)

連載 2

# しほサンゴ村 だより

上村 真仁

-3-

第42号では、白保の人々とサンゴ礁との関わりを、新石垣空港問題に触れながら紹介しました。今回は、地域コミュニティ主体の保全活動としらほサンゴ村の関わりについてお話します。

私が白保に赴任した2004年、保護活動に取り組む人たちは、「島の人はサンゴ礁保全への関心が低い」と考えていました。しかし、白保の人々と話をしていると、決してそうではないことが分かりました。むしろ、地域コミュニティが保全の中心的な担い手となる必要があると考えるようになりました。それにはいくつかの理由があります。

一つは、人々の暮らしと、サンゴ礁の密接な関係を挙げることが出来ます。長い歴史の中で、島に暮らす人々はサンゴ礁の恵みや地形、空間を、神事や日常の中で巧みに利用する知恵を生み出しました。こうした“サンゴ礁文化”は、それ自体が保全、継承すべき重要なものです。

二つ目は、人々がサンゴ礁を深く愛し、誇りを持っているためです。村の共有財産として認識し、強い所有者意識を有していることが分かりました。実際、琉球王朝時代、地先の海の利用は、王府から

与えられた権利でもありました。

最後に、保全には、地域の参加が不可欠からです。農地からの赤土流出や農薬・化学肥料・生活排水・畜舎排水による水質悪化、沿岸部の土地利用の変化、乱獲、観光被害など、サンゴ礁を劣化させる多くの要因が、沿岸部の人々の暮らしと深く関わっているからです。

しほサンゴ村では、2004年、「白保持続的な地域づくりプロジェクト」をスタートしました。このプロジェクトは、多くの村人が参加しやすい枠組みとして、「持続可能な開発」の考え方を取り入れました。サンゴ礁保全を地域の抱える社会問題や経済問題と統合的に解決しようというものです。

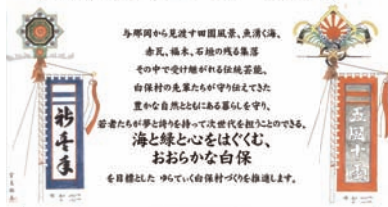
まず最初に取り組んだのが、コミュニティの合意に基づくビジョンの策定です。折しも白保では、新石垣空港開港による変化に備えた村づくりが始まろうとしていました。しほサンゴ村も、地域の一員として、資源の掘り起こしやアンケート調査、ビジョンづくりに参加しました。その結果、2006年4月白保公民館総会で、「白保村ゆらていく憲章」が制定されました。同憲章は、「海と緑と心を育む、おおらかな白保」を将来目標としています。「世界一のサンゴ礁を守り、自然に根ざした暮らしを営みます」として、サンゴ礁の保全が盛り込まれました。

また、サンゴ礁文化の継承や、自然と調和した産業の育成にも取り組むこととなっています。

同憲章の制定は、サンゴ礁保全が地域で合意された重要課題と位置づけられたことを意味します。これにより、白保自治公民館を中心に、村を挙げたサンゴ礁保全への取り組みが可能となりました。これまでボランティアとして捉えられてきた自然保護活動が、地域づくりとして位置づけられたことで多様な活動につながっています。

憲章に基づく、具体的な取り組みについては次回以降にご紹介します。

## 白保村ゆらていく憲章



- ＜白保村づくり七箇条＞
- 一、白保の文化を守り、未来につなげます
  - 一、世界一のサンゴ礁を守り、自然に根ざした暮らしを営みます
  - 一、石垣、赤瓦、編木を愛し、きれいな街並みをつつやます
  - 一、息遣った自然を活かし、村を支える地産地消を育成します
  - 一、地域の教育力を高め、次世代を担うたくましい子どもを育てます
  - 一、スポーツや健康づくりに励み、心と体の健やかな長寿の村をつつやます
  - 一、ゆらていく心で困難し、平和で、安全な世界に誇れる白保村をつつやます

WWFサンゴ礁保護研究センター (しほサンゴ村)  
TEL : 0980-84-4135 kamimura@wwf.or.jp

沖縄県石垣市字白保 118 9:00-17:00 (入館無料) 水曜日、年末年始休館  
http://www.wwf.or.jp/shiraho/ http://www.sa-bu.com/

## NPO/NGO 紹介

- 15 -

### 琉球大学 サンゴ礁生物研究会 ~ Reef ~

私たちサンゴ礁生物研究会 ~ Reef ~ (以下 Reef) とは琉球大学のサークルです。活動の主軸として、「遊ぶ」、「学ぶ」、「伝える」の3つを掲げ日々活動をおこなっています。メンバーのほとんどは現役学生ですが、社会人や研究者の方々も賛助部員として活動に参加しています。

「遊ぶ」とは、沖縄のキレイな海で遊びましょうという活動です。毎週一回、野外での活動を行っています。基本的にはスキューバダイビングでの活動ですが、潮が引く日には磯歩き、時にはマングローブなどに行くこともあります。まずは、人間興味を持った事には真面目に取り組むので、興味を持つところから始めましょう、といったところでしょうか。

「学ぶ」とは、主に海の生き物についての自主勉強です。基本的には、活動中に海で見た生き物を撮影し、その生き物について調べることが中心となります。大きな分類群ごと(だいたい門もしくは綱レベル)での特徴を同時におさえていきます。冬(12~2月)には合宿を行い、年度を通した「学ぶ」の総決算として Reef ブックという冊

子本を作成しています(写真1)。部員の主観が多分に混じった「沖縄のサンゴ礁の代表種」、「サンゴ礁域の各動物門の分類」、「高次分類群ごとの特徴」、「スキューバダイビングにおける注意点」などを含めた100ページを超える豪華な内容です。

「伝える」とは上記の活動(「遊ぶ」「学ぶ」)により部員が吸収したものをまとめ、今度は人にわかりやすく説明していく活動です。このサークルの要であり、かつ最も実践が難しい活動であるともいえます。伝える対象にはもちろん新入部員も含まれますが、時に部外の方々へ伝える機会があります。具体的には、地元の自治会等が主催する磯の観察会でのガイドや運営のお手伝いを通して、子ども達に海の生き物、サンゴ礁環境に関する様々な視点からの説明をしていきます。「伝える」ということは、自分のなかできちんと整理できていないとうまく伝わらないので、子どもに自分の知識や経験を伝える活動ということは、私達にとって大変貴重な経験であると思います。現状では社会人の方からの紹介を介して、お

手伝いに行くという形になっているため、年に数回しか行っていないのが残念です。

Reef の活動についていろいろ書かせていただいたのですが、私個人の印象に一番強く残るのは合宿です。特に Reef ブックの作成に際して、「沖縄のサンゴ礁の代表種」についての議論は大変面白いものがありました。頻繁に見かける種を掲載するようにしているのですが、「イソギンチャクガニはかわいいから載せよう」とか、「ウンパチイソギンチャクは個体数が激減したけど毒があるから載せよう」、などそれぞれ思い入れのある生き物について、延々3~4時間議論することもありました。活動に参加して1年目は、まだ種名を言われてもピンとこなかったのですが、徐々に議論に参加できるようになったことが大変うれしかったです。このような活動をおこなっている Reef では、常時部員(もちろん賛助部員も)を募集中です。見学も大歓迎ですので、興味のある方は下記にご連絡いただければ幸いです。

(現部長: 近藤 真平 fukopoko814\_yaho\_72-ind0zyn@docomo.ne.jp)

琉球大学農学研究科 修士課程1年 近藤 昇平  
cyclosa\_confusa@yahoo.co.jp



写真1: 2008年度の Reef ブック(左)と2007年度の Reef ブック(右)



写真2: 磯歩き観察会でのスナップ。子供たち数人ずつを部員が引率しながら生物の面白さ、大切さなどを伝えています(上: 出発前、下: 目にした生物についてのおさらい中)。

## 編集後記

第12回大会には非常にたくさんの発表申し込みがあったようです。実行委員長の酒井先生をはじめ関係者の皆様のご苦労は想像もつきません。今号に詰め込まれたプログラムにその一端が垣間見えますが、度重なるレイアウト変更に対応してくださったHさんに感謝。

編集担当 渡邊敦



日本サンゴ礁学会ニュースレター [2009 / 2010 No.2]  
Newsletter of Japanese Coral Reef Society No.43

- 編集・発行人 / 「日本サンゴ礁学会広報委員会」
- 藤村 弘行・安部 真理子・梅澤 有・鈴木 倫太郎・中村 崇・浪崎 直子・日比野 浩平・渡邊 敦
- 発行所 / 日本サンゴ礁学会 ● 事務局 / 茅根 創 <kayane@eps.su-tokyo.ac.jp>
- 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院 理学系研究科 地球惑星科学専攻 Fax: 03-3814-6358